全 林羅山 晴草紙

一卷

13
3098
1

東都 醒醒齋京傳著
陽齋豐國畫 文溪堂梓

櫻姫全傳

曙草紙

全部五卷

序

大吉

四典佛書ノ経典ハ

夫唱婦隨ノ家和楽ノ極

嘗聞内典因果之理一切衆生等状情態皆佛指爲、姑數諸男女際会婦隨、然一変如恩愛比是好因緣福果成衍後見

門 へ 13 時 號 3098 卷 1

業鏡文字ノ如キ蓋佛語ナラン

矣乃王夫賢妬媢嫉於正
后妃嫉反目此是孽因縁
禍果或及骨肉矣吁一念所
翻為福為禍如影隨形可不
慎哉如醒之子所着櫻姫金
傳寔是現在業鏡照出奴

如許何許ト同シ

少可潤不悲之孽因縁若夫
繫此孽因縁者倘執此業
鏡氣肯反照勉修善拒勧
除悪念則忽出如許苦海
而速乃一場福地歌此編要
一二荀且看過哉醒之子索余

題目錄所載文化
乙丑晩秋書道人玄
於十才精舍

意許精神之所至何事不成乎陽氣之所照
透于金石矣其如斯之謂乎

讀陽一寒生識

昭和九年
七月二四日
求

櫻姫全傳曙草紙

例言

○此書何人の作なるを詳ふせず。友人拜田泥牛子市ふ購得る所なり。曾木偶ふ舞しめ。歌舞妓ふ作る。普児女の耳目ふ娯まんとす。養女櫻姫一期盛衰の事ふ記し。正史實録ハ更なり。野史稗説といへども。いまだ載ざる奇談多し。狂簡といへども往々實ふ兼。因果輪廻。無常轉變の理ふ示し。遅速ハあれども。善悪到頭つひふ報ゆる事を録せり。よく〳〵虚談ふもの。児女勧懲の一端ともなるべし所聊えのみ。書肆の需ふ應じ補綴〳〵与へぬ。

○原本のまゝ俗文といへども。上代の言ふ以て記し〳〵ぶ頗雅なり。されど其仮ふ寫せば。俗耳ふ遠を厭。今更〳〵卑言ふ用

且一向児女の聴を喜しめんと欲し。形容潤色ふ過されて言ふ
くりへさしば。記事の體を失ふのみ。自然雑劇本の文体を脱と。
西鶴門左衛門自笑其磧等ぶ。糟粕を嘗ふ似しり。殊更魯魚
の謬假字の差さへめざれば。識者の嘗詆ふ嘗ぞおほる
べし

○繪ふくるふ幼い児女の目を慰。且文のかき得ざるを趣ふ示と
すりこれも時代の古様ふ考へ畫べき事かなれども。無下なる
人ハ風俗ふ今古の差めるふ雑れば。烏帽子著られ船人袴
著る馬士なと。ふ画ばかりく怪まん。依くをべての物目馴しる
様ふ画しむ故ふ画中居室人品より衣服器物ふ至り。古なる
物ふ古へ画く。時代と繪と大ふ差くられ画者の意ふあるべきとへ

ども。唯通俗を専とし。止ふ得ざるの業なり
○目馴しる様を画うちふも。梓現ハ建保職人歌合の圖ふ摸し。常照
坊の竹笈ハ。法然上人行狀繪巻物の圖を摸せるなれば。間ありて
古今混雑せり繪難坊の訕を若何せむ
○紫ふとのへるるり下の文ハ予ぶ考まり本文とのへども原本の大路
ふ過の小徑の如ハ總て予ぶ補文まり。此書を曙草紙と名づくる。
櫻姫の傳奇まれば。藏五抄ふ櫻の異名ふ曙草とのふふとひよせ
べきいつまりなり

丈化二年乙丑秋九月

醒〻齋主人識

引用書目

○事林廣記　○丹波志
○大系圖　○異本源平盛衰記
○義経記　○東鑑
○山州名跡志　○長門本平家物語
○姓氏録　○徒然草
○說文　○玉造小町
○宇治拾遺　○文德實録
○三教指歸　○九相詩
○法然上人行狀繪詞　○蘆分船　難波名所記
○二人比丘尼　石平道人著　○明月記
○唐陳玄祐離魂記　○正燈録
○無門關　○剪燈新話
○豔異編　○夏子益奇疾方
○萬病回春　○奈良晒
○南都名所記　○大和案内記

以上三十部

曙草紙總目録

巻之一

一 彌陀一郎網得佛像
二 鷲尾義治惑溺玉琴
三 野分方嫉妬害玉琴

巻之二

四 玉琴魂還著胎子
五 轎裏遺書公連償皐
六 野分方季春誕櫻姫
七 清水清玄春意櫻姫
八 退去清水清玄落魄

巻之三

九 咥蝦蟇小蛇會両士
十 櫻姫慕宗雄一臥病
十一 夜襲第勝岡亡義治
十二 蝦蟇丸傳帯取池記

巻之四

十三 盲女小萩佃死雪中
十四 二人比五尼發心記
十五 櫻姫悲薄命二臥病
十六 櫻姫甦生清玄枉死

巻之五

十七 鷲尾家士復故君讐
十八 櫻姫麗妖氣三卧病
十九 櫻姫離魂化為骸骨
二十 櫻塚楊貴妃櫻来由

以上 目録終

櫻姫全傳曙草紙巻之一

江戸 山東京傳補綴

第一

彌陀二郎綱得佛像

事林廣記云善ふ善報あり悪ふ悪報あり善悪報あるも時節いまだ到らざるあり深耕浅種尚天災あり己を利し人を損ぜ豈果報あらんや麻を種く麻を得豆を種く豆を得る天網恢々疎にして漏さず善悪若報あらんバ乾坤も必私あらとの人り此語宣哉昔より児女の耳ふるまてる清水寺の清源養女櫻姫を執愛し死て恐魂姫をあやまりさる物語分考ふ因果覿面乃理彰々たるも毫釐もたがわぬ悪報の[illegible]ふいまるとゆのふを戦慄くく毛髪いよぐろ一読あり爰に人皇八十二代の帝後鳥羽院の御宇ふあるして丹波国栗田郡ふ鷲尾

十郎左衛門平義治といふ人ありけり志温和にして武備の業も西
にして文事の道にも暗からず家士部等あまた召つれ山林田庄おほ
く財宝山と積み家富栄けれど人皆桑田の長者とよびて尊敬せ
りけり（丹波志）さても此十郎左衛門義治は人皇五十代桓武天皇十三代の
後裔鷲尾三郎経春の嫡子なり（大系図）父経春は寿永年中九郎判官
義経公平家追討の為摂州一の谷鵯越を落し時召に應じて山路乃
案内をいたしそれより後もたびたび軍功をあらはしかの義経の愛臣と
なりぬ（盛衰記 義経記）其の後義経公舎兄右大将の憤責に逢ひ此彼にさすらひ
あるひは奥州に下り秀衡をたのみ其の郎等なる経春相共にひそ
彼所に下りたるが文治元年四月晦日（東鑑 閏四月）義経衣川の館にて自害あり
時経春も討死をとげたりしかば子息十郎左衛門義治事
聞く深く悲しみ丹波より遠く陸奥に下りて父の髑髏をもとめ
取国に葬送いとなみ累七平咲の設齋追薦に餘多の名僧を請じ
諸天に供養をなしその霊魂を祭りたまへば扨あれば又
十郎左衛門義治の部等に真野水次郎といふ者あり其父は江州真野乃
産にして兵衛貞次といひ義治の父鷲尾三郎に仕へて忠臣無二の武夫
なりしが戦場に於て手柄をあらはし軍功をあらはし陪臣なれども九郎判官殿の
感賞にあづかり車やうの扱此貞次一子なれば事なく夫婦佛神
に祈りたまふに一男子を誕生す其児八月十五夜に生まれ月も
水盈の精なるを以て水次郎と名づけ此水次郎成長にしたがひ
大膽強氣にして力量人に越邪見放逸にして更に憐の思なく常に
山川に奔走して猟漁を楽みとし一向殺の行ひ悪しかりけれど人皆

鷲尾十郎左衛門
義治内室
野分の方
と酒宴を
催して樂
ぶきらむ

異名ゑ仕ける悪次郎とぞ称しける又貞次これを愁ひ度ぐ異見
をくわるといへども聞ひざれば且怒且悲夫婦唯是のみを苦みやくく
あしくしねるゑ鷲尾三郎奥州衣川ゆく討死せしゆ貞次愁傷の
餘りたゑ陸奥ゑ下り二郎討死の所ゑいくらてつひゑ殉死ゑぞあ
くられ誠是をくひまもある忠臣かちこれゑ依く義治貞次う忠死を
憐み其子水次郎ゑ高禄を与へ真野水次郎春次と名告て召仕いと
るゑ水次郎ろく殺生をのみ常ゑ業らもの〳〵ぞ大酒と婦こ大力
ゑ力やもをれば争論を惹出して人を打ちとるゑさびひの悪業ままく
つのりられいことをあくむ者あるく義治ゑ告く罰一西へとをむとる
義治彼が性質をくるゑ悪行をあをとといへども元来無欲ゑく名利ゑ
貪る心なるれば能教諭をくくへあ後くゑ其行もあわるべくと心と長
萬ごとものびこそ召つるつまるれ全貞次が生前の忠義ゑ思く其子を
憐むるれるしさくのるるゑ水次郎ゑ時丹後國九世戸の入珠堂ゑ
叅詣し殺生禁断の場ゑこづる網をくぐく奥ゑとりられば浦人これを
見つけく制しるゑ憤り尽く打倒しおほく疵をおやせく立去りるり
浦人ども彼ハ丹波國来田の長者ゑ郎等なりとゆをひく鷲尾の舘ゑ
来りく水次郎が狼籍の子細ゑうるくくるゑど義治これゑゆ一ゑ朝廷
のきこえをくぐるゑ二ゑあ依怙の沙汰ゑおもひくをいくひくせんと
るく水次郎が家財を没収し國のさるひゑ追拂まるるゑかくて水次郎俄ゑ
浪くの身となり杖と失ひるる贅者鰕ゑくるれくるゑ水田の思ひてこのむ
木蔭さへ雨のり身ゑかくるべ所もるゑれば山城國淀のかるゑ一にとゑ
所ゑ腐といるくぐるゑの小家と造るく住異名と実名とくふるく悪次郎

と名告あり。ひもすがれば日来好れる漁父業にいと倉しくくらしるが
ある時頭陀の沙門めぐり〻此村に来て黒谷流の専修念仏と唱へ
人の門ぐちにたゝずみて手の裏に次郎ありく〻彼僧来れば心漁
猟あり〻網の裏魚ばかりを大ふるひの妨とるまち若又来れば打擲
して再来ぐるやふかとのゝべしと思居るふつゝるかの僧又来り
門ふるれば杖と鉦とうちひろり炉火の裏ふ鑽着
とさゝいまゝ火とるゝ額ふ印して放飯しるふの僧痛むさぬもえをと
怒まる色もあゝ只悠〻ゝ出られば次郎大ふ怪こ跡を慕行く其
在所を窺とまるふ不思議哉かの僧淀川の水上ば歩こ陸を行ぐ〻く
西ふひろひ〻去りぬ次郎まもく怪こるほちゝひゆくふ西山粟生野の
光明寺とつゝ寺ふ入りゝ忽又えをかりめ次郎其まゝの人ふ就〻

まゝぐの頭陀の僧此寺中ふありやと尋ふその人答〻當寺ふ頭陀の
僧あゝ但本尊の釋迦佛時〻頭陀の僧ふ現ぐ〻結縁しのゝ
傳説まれぐも親ゝ云る若あゝと語る次郎いよ〻いぶろ仏殿ふ入り
本尊ば拜まるふ額ふ火印の痕めり〻頻ふ血流しめ是ゝ已来此る像を御鉢の釈迦と号せり
次郎親く此奇特をゝ〻佛法の不可思議あること仏會得し深く
懺悔の心ば生じ〻これまでの悪業をめ〻なめんと自心ふ誓感涙ば流し
〻家ふ飯りるがかの時うびとゝ〻る錫杖と鉦いそぐ侘りり鉦のゝ〻ば
ゝるふ常照とつゝ二字を綴つけめ正是仏の光明十方世界を常照し
あつとゝこゝば示〻ゝあゝんとまゝとく奇異のおりひしゝ〻〻ゝ扨
其夜の夢ふ容貌端麗の僧来りく告て曰汝機已ふ熟と感應あり今夜
網とゝぐゝ〻淀の神の木ふ到るべし必有縁の知識ふ遇べしと告のこと

彌陀二郎
真野
水次郎と
いひし時
丹後國切戸の
文珠
さもぐ
狼籍とし
浦人と打とこなり

切戸文珠

えゝ忽醒め次郎歡喜の思ひをなし小船に蒿〳〵こゝに到るに此時
已に三更のころひあり四方暗くして水面は赫奕たる光明逆て恰も
日の出るが如くあれば感悅ぎうあゝ其光のうちに網代さとあげたるに
紫摩黄金とおぼしき弥陀の尊像網にうつりめぐりまつる次郎これを
捧げまつり家に飯り香花を供じ念仏を唱へこれより菩提心頻に猒欣
の思ひ決定し遂に殺生の作業を止め唯頭を剃ざる出家のおもむき行ひ
なれば時の人これより悪次郎といへども改め弥陀次郎とぞ呼かそ
次郎發願〳〵一ツあり亡君亡父追福のため二ツあり諸人結縁のため
三ツあり怨霊障消滅のため諸國をめぐり諸人を勸化し一座乃
仏堂を造営し尊仏と安置し奉るべしと願ひおりひ五ツの笈を造り
尊像をいまさまざまに山陰山陽の國々めぐりあるきて出去ぬ此時に
建久元年の冬のなかばなり誠是逆則是順の理に違ふことを
悪ふつゝん者は又善あるもつゝとかへれ常言も此弥陀次郎がごとく
なるべし

已上山城名所志に所記と大同小異あり

第二

鷲尾義治感溺玉琴

爰に又鷲尾十郎左衛門が妻と野分といひし此年二十歳にあまり
なれども誠に絶世の美人にして翠黛紅顔の粧花もはぢあり馥玉暮
照月の姿あるにも耀ぐばかりの容貌の美麗なるのみにあらず聰明
伶俐人にすぐれ女の嗜べき諸道に通じ武士の家に養ふ身にはかと
いへども少しも武藝をも心がけべきことなりとて歌学糸竹の遊び
のひまにあるを太刀あつかふ業なさんとて学問にあるうるの男子にあらざるう

まされ給ひ手段あり。此婦人の出生を尋ぬるに櫻町中納言成範卿
盛衰記平家物記の落胤なり成範卿下野國室の八嶋に流されたまひし時賤女に
契りたまひしが其女の腹に宿り卿帰洛の後出生しける女子なり十歳の
頃までハ農家の貧なるに育ちし艱難にくらせしが鷲尾三郎偶此女
を見て貴族の胤といひ美麗なる生まれなれバ乞とりて養女とし成人の
後子息義治にめあハせけるなりかくありけれバ腹こそかはれ卑しき正是名に
おへる小督局の妹姫なれバ姿の美しきも理く日来夫婦なかもむつまじく
比翼連理のかたらひ階老同穴の契あさからず花を愛月を弄にはけるも
そのしことそのふせごといふてはあらざるべき宿世の定りにやあらん
世嗣なきうけどこれのミ愁の一ツなりしバ神に祈仏に願といへども更に験
なし義治これまでハ一妾をもおかざりしが今はかくてハ叶ハじと思ひ時に一子を

まうくべきのちなきハ不孝の第一なりとて此うへハ妾を召仕ふにしかじとて頃日
京都より一個の美女をよびくだして腹心の家士篠村八郎といふ者にあづけお
かれが家のおくに新室を造り召仕ひけるにそも物毎かしこく心ばへおとなしぬ
さりとて義治遠慮深き氣質なれバ野分の方のおもハくをはばかり當分
此事沙汰をなさずひそかに八郎が口を閉させ深くかくしおかれけるが家士
郎等なんどもさらにこれを知ざりけり抑此女ハ廣き都のうちにもならびなき
白拍子にて姿といひ業といひかの祇王祇女佛などにもおさおさおとるまじく
されバ名を祇福といふ也大政入道在世の時ならバさぞな寵にあづからん
などのひとく六波羅様を好む若人等おほく戀慕しけるが此度義治にあ
贖まて當國にくだりつるなり年ハ十六歳にてなりぬ歌舞吹弾の業を
よくせるうちにもわけて琴の妙手にて鳥舞魚躍の術ありかの俊蔭が

彌陀二部頭陀乃
僧ゑさく鉄箸を
ゑさく額ふ印を
頭陀の僧ゑ
光明寺の釈迦佛
乃化身

女ふもおろく思ひまどはしく祇福とのふ名を更く玉琴とぞせり
義治くどめのかどは唯世嗣なまうくん為だうりゐ〳〵いさゝうも色と
ひさびれ心はあるうるが漸くふ則ゐ〳〵むふもとがひ都ふく餘多の
人ふうるこ世情ふ通じ風流ふ長じるる玉琴が趣おほれ志ふまどひ愛慕
の情日〳〵ふ深くるり一向妾室ふのみ通ひ〳〵日夜の酒宴糸竹のもてあそ
秋の夜も短〳〵と月ふかこち春の日もくるまるんこゝ公をこゝけるがつひあ
玉琴ノ身おりくあり義治よろこびふ堪ずといへども いまゞ披露せど唯
とうふうるひ〳〵ぞ居さうめかくあるうれば野分の方の寝殿ハおのづう
うさしく糸の岩橋あるうさえく夜の契も遠ざうりいるの笹原そよと
ぶふ音信あけまゞ翠帳ハしるる〳〵く垂紅閨ハいぶ〳〵ふ閉〳〵枕の塵を
〳〵ふべん心ぶふる〳〵平日秋の思ひ〳〵はまゞをうちうるのこゝうち

下ぐれ口さがなんハ昔も今もかくるゆるあく一時侍女ともぞうりく野分乃
方ふしるるハ君ハいまゞもろ〳〵めさどや桐公あんさいろこころ都より玉琴
とやうんいよ一人の美女を召下〳〵ひ〳〵篠村八郎が家ふもあれりひ
日夜かこふかく〳〵酒宴糸竹ふのこめう〳〵ひるふ下館ふ篭居さも
うひ兵書を講じさせく学ふるゆあるめいうるそうごとあく
下館をうのびいさもとのひ〳〵ハ彼所ふ通ひのみてあり扨御寵愛の餘り
御側を宿〳〵や余程月かさありもうも左りぐうこうけさまいりめ若
御男子あるぞ誕生めべかの女ハ寵ふわうり權をうぐそ人もるげふあ
まひ君の御勢ハ日のうこふく如くあり行くのふかひるる御名とあせ
さるうんざ〳〵んかく仕へまうりく深元御恩ハかくふる我くうれべこと公
学より日夜ふ胸のかひ〳〵の消る隙あく唯くちをさ悪〳〵さふ堪くんべ〳〵ど

それ迄の忍びもつかまつりしめ相公すぎて彼に溺れ給ひ且ハ御家の為あし
かりなんとされ折ふしつんのうしく御諫言申しせのへなどかくるくぜやしける
野分の方これを聞て色を正し我もとに仕ふる者ともおぢおそれ汝等ハ
志の曲りたる者ども哉玉琴と申す女ハ我まさくより知るところの露ばかり
も相公を恨みまいらするべきいはれはなし我年ひさしく妻として仕へまいらせ
果報つたなく今に一子をまうけざりしハ兼て妾が召仕ひ玉ひしことをもめでしく妾が
世嗣なき、せめてハと思ひ居る折なれバよき幸なるぞや民百姓までも妾が
召仕ふハめでたきひなりましく相公ハ當國の長者と敬ひ玉ふ御身なれバ
寵愛の女餘多ありとも何の憚りあらんこともあるべからず畢竟遠慮深き
御家督あればこそ我おもんずる所なり憚りあるとおぼさるゝかの女若世嗣を産
一家中の悦びこのうへやあるべき腹ハ素よりかりの事なれバ其子ハ則我実子ま

同前之いたづら隔る心あるべし我ハ唯安産なせしめ祈るなり又深く溺れ玉ひて家
の為あしかりなんなどと汝等が口よりいふべきにあらず恩顧の老臣餘多
あれバたとひ相公に誤ありともいたづら汝等が言ふべきにあらず汝等が所
我が思ふに似たくありて邪道にいざなふなりかゝる浅ましき心なれバて
我に仕へんと思ふべからずかくと若きの女にいひ聞せ我心に嫉妬ある
やうなどおもはれんハいとはづかしからず此後彼女の噂さする者あらバ
きつとやはり衆ならざらんぞろうてとても愚なる者ども哉とつぶやき
奥の殿に入りたれバ侍女どもハ恥じて面を紅にして退きし思召前ハ又
格別さまのよしなりしとて此不興にあひぬ誠に君ハ賢女にておはすると
大に感じてをのが房々に退き此後は彼女に於て一言をかけし者もなく
唯其賢なる志をのみ密に語りあひて感歎しけり 扨其頃木曾の残黨

彌陀二郎
淀川ふ網を
下し〳〵く
紫摩黄金乃
霊佛を
感得と

平家の餘類深山幽谷ふかくに住く民の災をはらひけるが其類ふや當國
ふも幼女を奪かすよりたへ人の妻とさへ盗取く遠國ふつろ〜妾婢或ハ
遊女ふ賣賊あり百姓等これが為ふ苦しみなげき義治安〜ど思ひ捕盗
の武士ふ命じ〜捕へしむるふやがて四人の賊を捕率て来りぬ弓絃賣高野
法師板金剛賣算者あるふ姿をかへる賊どもなりもがうちを
あ〜〜めいるふ箇く懐中ふちいさき蝦蟇のひかびるを持りよく
入れば常の蝦蟇ふ異ふ〜二三すじうちの尾あるこへ何の為ふ持
ぞと糺明するふ其ゆゑを問いたるに堪ずや算者ふ打扮る賊云やうこれハ鬼界嶋ふ生る長尾蝦蟇と申
とものふ〜漢名を溪狗溪ゆをはうけるまつりかの嶋の山中
溪澗の裏ふ生ずるの〜他所ふハたえ〜なる物ふ〜ハ我輩の仲間

餘多あり〜諸國ふかくに住原相たもつ人を賣買するふ尼〜面を
知ぬれば此蝦蟇を證ぬ〜事を便じハ故ふ我輩が隠語ふ蝦蟇つ〜と
侍ぬらとへで其餘の者ども口を閉とぬ彼がもふ小もたがひハぬど
とひ入れぬまが獄舎ふつ〜ぬ扱此四人の賊のうち弓絃賣ふ打扮
ぬ〜ぬ〜の賊ふあ〜ど名を蝦蟇丸といひ力量ぬ〜ど武勇ふ達し
ぬ〜容易捉ぬ〜ぬ者あ〜ねど此時疫癘を〜〜ぬうち瘦おろへ力
ぬけ〜ぬ〜ぬがぬさめ系ぬ〜〜捉ぬ後白河院の御宇西海ふ海賊
蜂起〜人民を苦しぬを鷲尾太郎維綱征伐し其軍功ふよりて
右衛門尉ふ任ぜ〜れ是乃十郎左衛義治の曾祖父なり彼蝦蟇丸其
海賊の張本木冠者利元が子なりされば鷲尾の家ハ父の仇なれど當主
義治を打〜恨をもるんとかの婦女を奪盗人のうちふまぎれて當家ぞ

うくひろぶ天命尽くく捕まらり蝦蟇丸獄舎ふあらく思ひくろへ我病ふ
よろく身体自由あるどかくゆくくとちうも仇家ふ捉まるくらちさよ
誠ふ運のつきあるべゆゑあるべしちうしいろふりしく此度の一命ゑのれ他仇を
ひくうんとさあぐ思量しるぐ日數へくやうゆく力つるくるゑおがえけどば
まづ心中ふ喜び折ゑうくひ居くるふ一夜風雨ちげくく守らの者も急ち
くちぐうぐるゑ幸ひ三人の賊ゑ尽くちめ殺く獄舎ゑ破りく逃失ち
翌朝ことゑ知らく大ふ驚るゑ四方ふ追人ゑ走くれどもつひふ行方ちれを
あらぬ中こせんとべなく三人の賊ゑのけるぐどく罪ふ行ひく衆ふ示く
ちられち国中賊の恐を忘れく百姓等ゑびめらかえて此年もくを
建久二年の春のはふあらぬ野分の方つをぐゑ慰る為庭ゑいくらえ
さくあるえる前栽も一ちふ趣きあれば一日折戸ちくむあるゑ居くるゑ

松の梢ふ鳥あらく何ゆくん地とふおとさるゑうきば蛙やうの虫あるゑ
ふくさるゑふやと香箸とちりく庭ふをちうちかのりのをちくくくよく
うをこば七ゑ尾ある蝦蟇ゆく尋常の物ふあらどど野分の方思ふ去年
蝦蟇つくとゆくんいふ盗人と捉へらをくるが箇く懐中ふ尾ある蝦蟇を
持くと侍女等が伽どゑくれちうゑ笑めちをこば此其物あるん後園
ふ埋くられくくくくくが頃日乃庭造うふかくこの土ゑ堀くへ此物の
ゆくくはをくれゑ鳥のちう来ちくれゑ疑るくちうどこ此物我手
ふいうくい密討ゑ如とちうふ時乃いくをくれあちと心ふうゑ
ぼゑれが折くもちうふ人ちうれゑ竟ひいとどくくくくくく香箱乃
うちふいれくゆくかくくかゑぬ野分の方ゑ胸中いうゆ計らあゑ
下回ゑ讀得く知ゑ

第三

野分方嫉妬害玉琴

義治の家士のうちに兵藤太といふ者あり生得非義に好こ貪欲深く財宝にくんれと蠅の血にくるぐ一命に失ふとにもそ宝の為に顧ざるなどの悪性の者なりぬ野分の方兼て心中にたくこかりにことあるとき彼が性質をよくくしめおそれもちふ頃日義治朝廷に真を尽す為京都に上りつゝ留主なるに幸ひ野分の方かの兵藤太に奥深き坐敷に召出し声にひそめくいひけるは我汝が膳太に性をうめさく密ふゆゝしつるこのるが行ふまと速ふうけがひく人ふのゝをまゆやたをまゝうこへ当座の賞くゝ金子一百両に与へ相公の前をとらば後日立身にいとさとべ左は極密の大事なるに汝が猛言ことやされば語りやくとつに兵藤太一百両の賞金とやくゝまづ心中に思ひ

おそる刀の等にとり来りくいひられ密事とのゝあへ行ひうるなぜ
ざれども身不肖の拙者に大事にうちあけ命じまんとまづ身にとりく
本望の至りあやさとひ水火の裏にいりのやうに苦痛にうる事なりとも
いでうのるくけんに心おそれ玉つどに御物語ゆへ素他にのゝをなどやを
ゆへたとひ死とゝもゆまゝ武士の金打とれんもへとく等にうてちやうく
と打合くゝまづ野分の方にひ其一言を堅うへに疑ふべにふのず委語り
やまとべくとく膳にまりよせ汝かの玉琴ゆに知りつゝん我彼に奪取て
もべに稼のり汝めもの夜篠村八郎が屋敷にものび入りちうぐうとひく
彼に盗来るべ我に此坐敷にあるゝ相待べくとまやふ命にれば兵藤太
ゝめくゝ野分の方の本心にはうち驚くとのへゝ崩後と顧ざる者なれば
速ふうけひそいる安に事やくに心ちをほ徒乗ひるべくゝどと

鷲尾の家士
兵藤太篠村
八郎が家ふ
忍入て玉琴を
うばひとる

こゝもなげふうけがひろれば野分の方懐より香箱をとり出しかの蝦蟇を
とりく兵藤太ハ渡〳〵いとく此物ハ去年婦女を奪ふ盗人等諸の為
に〳〵持〳〵物をぶとりとる〳〵ど我をハ入り〳〵天のあらへをとり汝かゝ乃女をうゞゐ
たゝべそのあとふ此物を落〳〵置〳〵立去べしとかの盗人等が種類の仕
業とおのゝせ後の凝をうけまゞ計かりをぐ山ゆハ汝一人ハ〳〵行ふべし
かるゝど別ハ人をくとふべ〳〵ど篠村八郎ハ老人といへども勇氣をく
まゝ者かり怪次郎公光も幼年なれども武藝ハ達せりとゆかろく
〳〵事をあやまんべ〳〵どよく〳〵心をめらうべと示〳〵あるべ兵藤太
いらくうけ〳〵ゆうひと答〳〵庭つ〳〵ひハ出去れば野分の方ハ寢殿ハ
とり〳〵唯あるの夜を待侘かり〳〵あるの夜ハあらるゞ春の時ハ
似ど折〳〵雨猛〳〵風さゞ〳〵吹〳〵常なり〳〵夜のさゝゐあるべ

兵藤太よれ幸ひと悦び笠の下ハ覆面頭巾を着く面をゝ鎧唐櫃を
負道をを急ぐく篠村が屋敷ハ到前後の門をうゝふハ嚴鎖〳〵て
ものびいるべ〳〵便りをけ〳〵後門のかゝらゝある大樹の下ハ身をうくして
まで〳〵便宜をうゞひる時〳〵も一人の老翁一荷の擔をかゝげ蓑笠を兩を
ものゝ濁醪めさゝをやめせ〳〵と叫〳〵うちとゝれ門番の下部らいさゝ窓
より頭を出〳〵酒をかうんと叫〳〵ふハ老翁なつけど〳〵ゆゝとめ
ゐ声高くよべ〳〵ども出ずけざれば門番氣をいら愚頭ゐ物賣めゐ
聾ハやめ〳〵と口小言いひつ門のくぐり戸とあけく出かくとゝぐらゝ
追うけゆく兵藤太物蔭よりこれをうん〳〵天の与へと喜び其めゝ全ゝて
門内ハものび入れ門番ハこれを知〳〵ど酒を買をゝ〳〵再門をこゞし
ゐ扨兵藤太ハ庭づゝひハ奥深くものびいるまゞ逃道乃便を見

おさく格子なるうちにむかひの座敷に灯火のかげうつらく人語のひゞき
あり彼所こそ玉琴が居間なりめと思ふうちなづれなほ耳をかたむけて夜の
ふくるをまで待居られ春の夜の短きなれどもいとながく遠寺の鐘声が
ひゞく也子の刻なれば時分よしとぬれ足しのびかの座敷に近づきて
うかゞふに家内熟睡せしとおぼえて唯風雨の音のみなりければ縁
の上に登り妻戸引あけてうちにはいるに香氣馥郁として室ことに燈
火あかくしてゆかしかりけり屏風のうちをさしのぞきてみれば一箇の美女
錦衾に臥居たりかねて面を見知らずといへどもかゝる美人のあるべきと
此にあるべきいかれ玉琴ならずはまたあるべくもあらずと饑たる鷹の雀をつかむ如く
よろこびて夜着のうへよりかいつかみ手ばやく口に手巾をくゝませて
声たてさせず鎧櫃の裏にかくし置て負走出んとせしが大事を

忘置たりと立もどりつゝ懐中よりかの蝦蟇をとり出してかれ奥庭の
方へ出んと隔に植たる竹やぶのうちにくゞりいりしが宿鳥のおどろきて
鳴さわぐに肝をひやし道をえらびゆくに侍女どもにやありけん寝びれたる声
して庭のかたに人の足音をきゝつけて目を醒しぬと咄声に胸とゞろきぬ
さすが日来の大膽も事をとげんと思ふより心臆しつるにやありけん暗さはくらし
唯夢路をたどる思ひして辛じて前につゞきたる逃道にいでゝ樹木を
つたひて築地の上にのぼり鎧櫃をかたにかけおのれも飛下り吻とつく息
せくまもあらで空を走りて逃去りさて野分の方へ此夜侍女どもに酒を
あたへて酔しめ常よりも早く暇をとらせて体をしめおのれも寝間にいり
臥たるていにもてなしたりしがほどなく八ツの時計ひゞけば相圖の時刻
いたりとて手燭をとり寝所をぬけ出ていく間を隔たれ

奥深き坐敷にいたり燈火かゝげ一蔀あぐれバ上て待にやありて兵藤太
鎧櫃を肩に汗もしとゝに息もつきあへず庭つたひに来り相圖の嗽をなせバ
野分の方も金の鈴をふりならし相圖を合せ兵藤太座敷
に上り首尾よく仕おほせしとしるし櫃をおろしけれバ野分の方自ら汝
よくでかしぬさらバこれへ引出せといふにぞ兵藤太櫃をひらけバ玉琴
がひれ伏し恐ろしさのあまり身のおきどころなくつゝみかねけれバ玉琴へ絶入
人ごゝちもなかりけるがしバらくして目をひらき夢に夢みる心ちして
前後を顧るにいづくの所ともしらず金地の繪障子朱欄干眼を
射るばかり輝き珠簾の半捲る裏に容顔美麗なる上臈ひとりおハしけるを
おそろしくみれバ氷なす練貫に襲著て燃立ばかりなる紅の表衣
袿衣の縫目もあざやかにさびらかなれど縁箔の光りのさし灯火にて

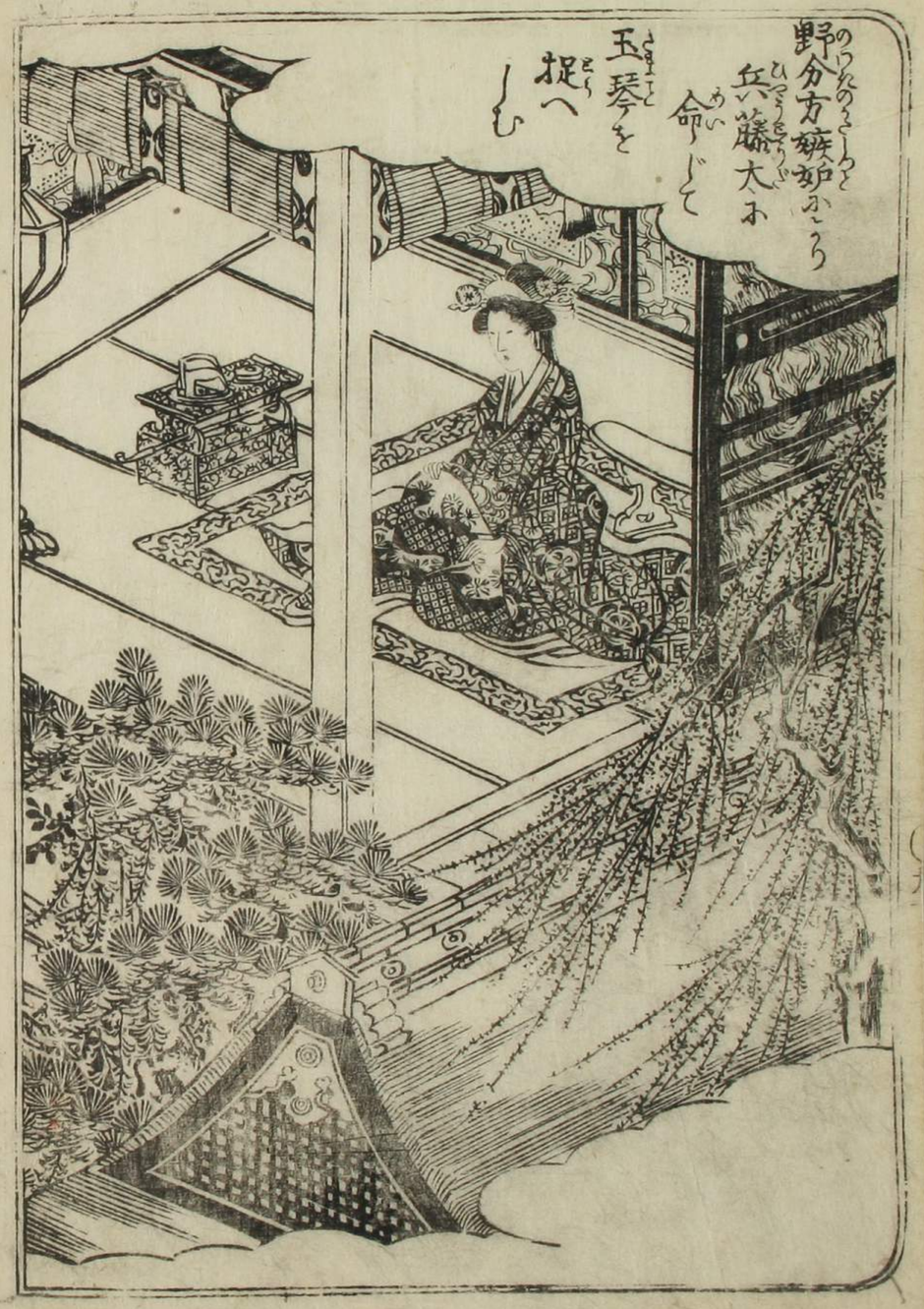
ちひさきかれぬ扨野分の方ハさびしげなる只あげし目にみやり
居たるが良ありていかにいかに玉琴とやらんいまだ對面をせざれバ見知りほど
野分といふハけしハあらじといふに玉琴おどろきさてハ此所ハ本舘なるかと
ちぢまりぬ野分の方玉琴がけはひとみてそちハさぞいぶかしくおもハん
つゝんでも氣づかはずにおもひ心おちつけるよりねといひやりければ
かれ詞にうは不審なれど唯さしうつむきて口の裏に答をこそかへさ
ありけるが兵藤太うしろより指にて背中をつきとがめつゝも
なるくるしけれバとかくあがくのをきらぬ野分の方氣をいらち簾のうち
より雪のごとき腕をさしのべて玉琴が手をとらへ膝のわきへ引よせて顔
とはりとてうちまもりさてさて美麗生れつきかな聞しにまさるかわゆさ
ならそちハ諸の遊藝に長たるよし琴に妙なるよしかのうへに問ぬ今宵

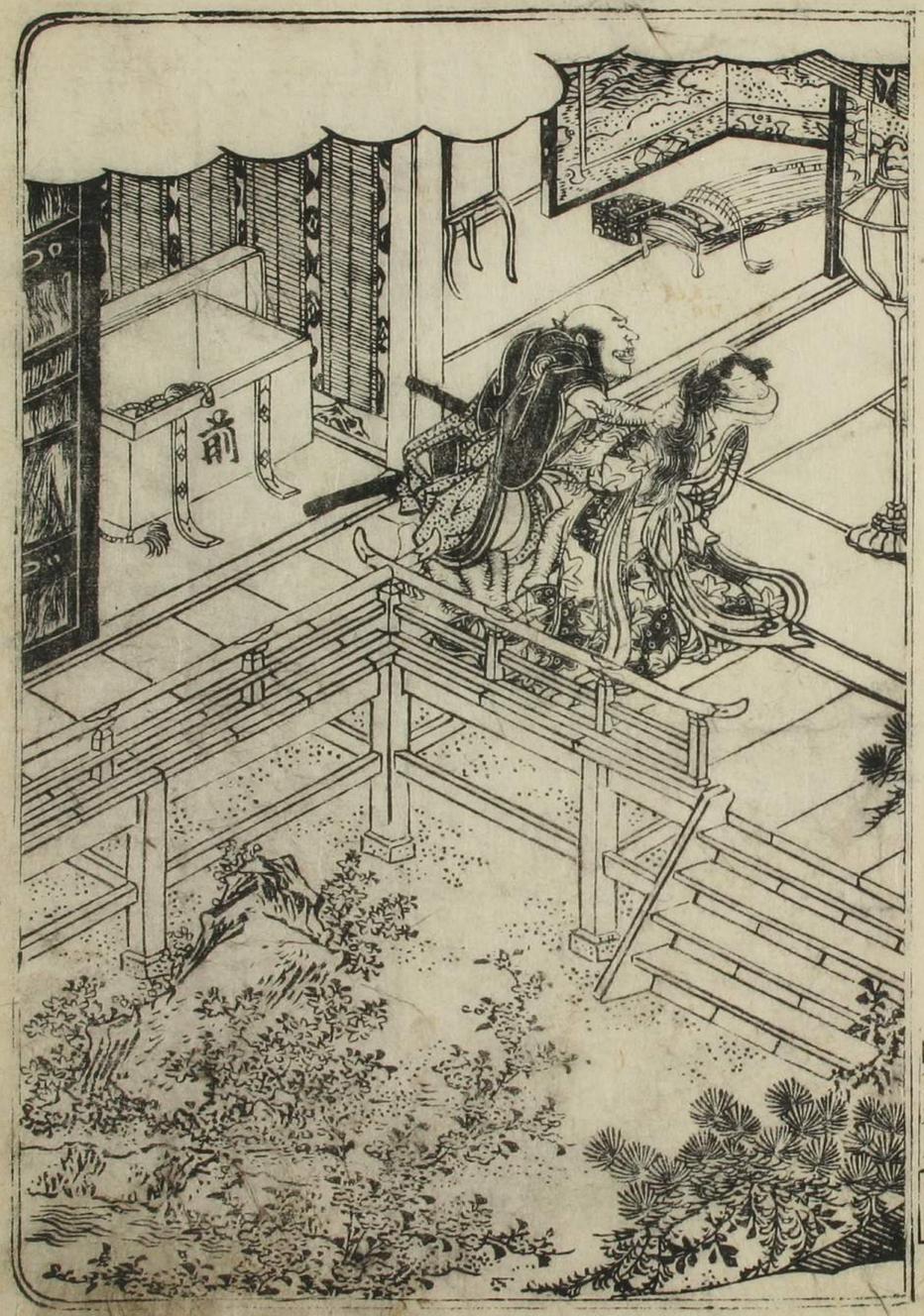
め
召よせらるゝ実ハ一曲ハ望為なり行ふまゝ一手もつゝべ〳〵やせてんや
いざ〳〵と琴ハ前ふさ〳〵つけく望とくれば玉琴ハ水責ハ責よあふ
よりもあはれ苦〳〵胸もとゞろく折るふいとゞら琴ハもつぶたさら
とゝこれをいるまゞいろある憂目ふあいんもとゝまゞ畢竟嫉妬
ゆゑふ我を捕へくつゝ目ハせあのと思へ行ゆも彼方の心ふもむゞ
憐とらけゝ此場ハのゝふ志と心ハさゞめ涙をおとゝいひるふ
独ハ音をやせ〳〵せんハいとゞ命おりまゞいるゝ行ん
もゆをまゝ手業の初ハゆゝさせあへゝといひるゝ琴ハ引よく
めしし唐の代乃名妓翠翹ゞへくゝる妾薄命とゝ曲ハ日本詞
和げゝいもあれも唱千頭もゝ泣声ゝまゞさとゞ姉手ゝ
るまゞゝゝ其声凄風楚雨のごゝく生ふあれハ

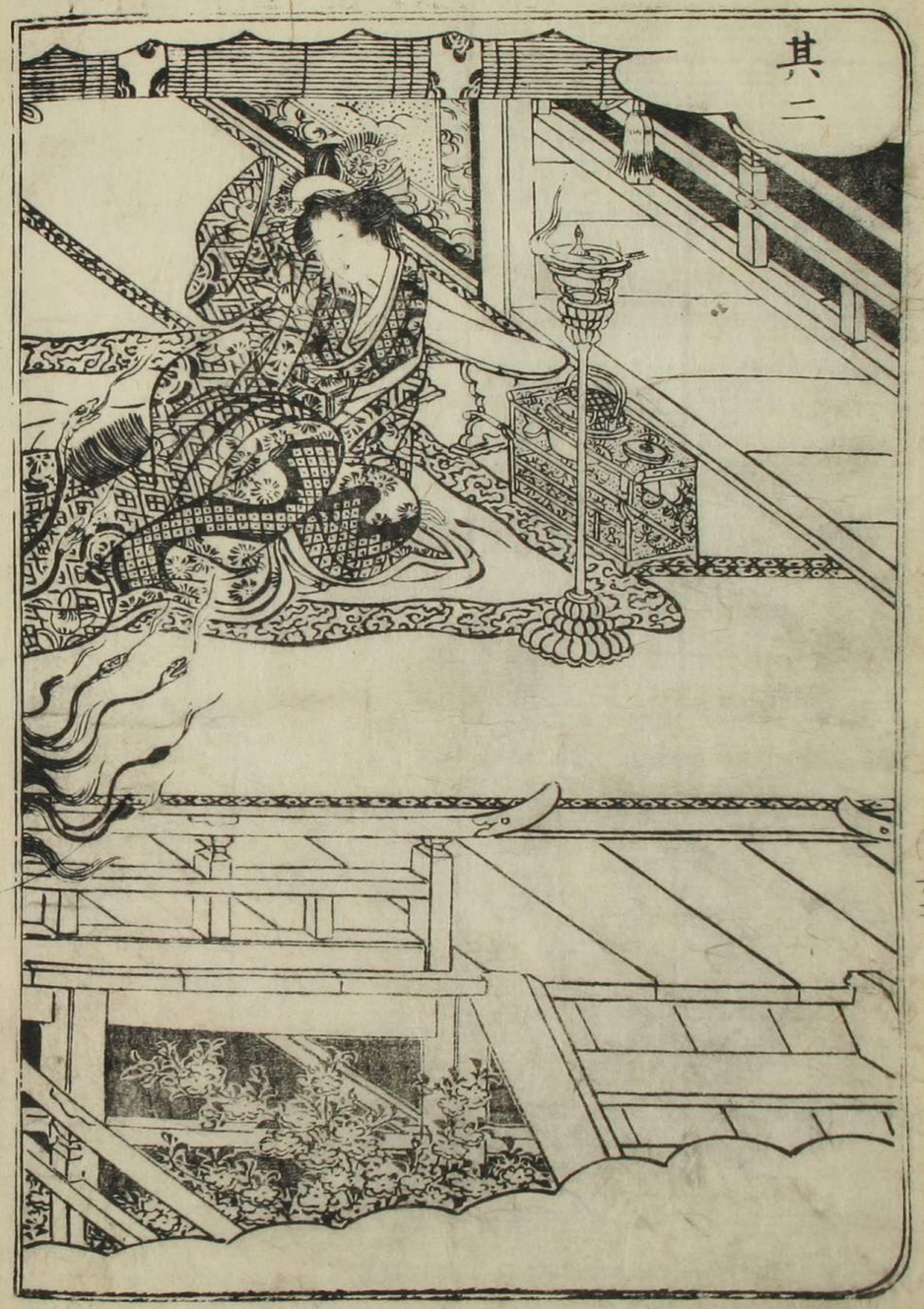
催ととへゞも野分の方ハあか嫉の心いやまゝぬ初弾ゞおゝゝげまち
野分の方ゝゝ実ふ奇妙の上手ゝ姿とゝひ業といひまたゞゞ
あれへゝゝど相公の深〳〵愛さとせあもうへゞとゝゝ相公と年ひさ〳〵
まひまゝ〳〵鴛鳳の鏡ふ影とゝ鴛鴦の被ふ枕ハとせもゝゞ
深ゝゝゝゝ汝ハ召下しあひゝゝ俄ふとゝあらまゝ須臾ハゝ〳〵對面
ざふあゝゞゞ皆是汝が所為ゝ〳〵ゞゞや汝閨中のさゝめゞふもさゞな
ゝゝハめゝゝひゝ笑種ふもゝゝんな彼といひ是とゝひねとあゞと
思ふ心ハ宇治の川浪ゝぬ写もゝ貴船の針も我胸ふ打思ひて
胸ふゝく火の顔ふ生引提の水もゝ髪ゝまゝゝ涌入る人ふ
ゝゝせまゝゝと堪忍〳〵これまゝゝゝ世ハの苦〳〵さいゝゞゝと
思ふゞゝ此恨ハゝゝんふ汝が胸ハさゝ肝ハゝふもあれさゝ

あるかくや腹くちやくく眉なくく眼なつちわけいきまたあ〜〜
罪〜〜もくくわ〜〜くくれ嗔恚乃面色ゆくしあるもおろうあり玉琴へ
瞻魂も身ふつるぞ口うちいあれつ〜ひろくへ君れのあよ分ちるふ
露どうもいつつわりひうみざるくぐもかちいうでう君の御うへ分めし
さるふとうあもべきそへくるあ妾分わ〜む人の讒言やきくえう〜んといひも
くくざるふいるく汝へ原白拍子わそおほるの人分まどう〜いうう分いひ
くれば其方の剣わく我分害せんと計しふ疑色相公も又その毒吉ふくそ
まどひあひつも報のわど愚ひくくせんどるどくく縁の黒髪とういつく〜
引倒〜〜額くれ分ふくうつけくくうれば額の皮ゆふくく血分ぶぬ
扨兵藤太ふむひひ此奴あぶう殺わ〜〜苦痛をうけめくくてつきくは
けるば兵藤太ゆく〜氷あと刀分ぬ〜〜新かけう玉琴ひうくくこ分

うう〜危き剣の下分でくくのぶきんともるを兵藤太髻つくくう
おうくや汝網の魚籠の鳥いうくうのうる道わ〜ん我君の恨の刃思ひくれ
刀分同さくふさくつけく追めぐれば玉琴へ身分ちぐめ現在妾ぶ胎内ふい
相公の御胤を宿〜〜くや八月ふみちめまば五輪とゆ〜んもくのひつ〜ん妾ぶ
命ふ〜わ〜れど腹の御子分暗よりく〜れ道ふ迷へせ中賽河原とゆ〜ん
ふく苦患分うけさせゆんくのいくくさよいうあれ宿世の悪縁わて妾ぶ腹
丑へ宿来させあひ〜そくぐれくく〜涙分灑のぐく流〜せめく〜産おく〜
ゆくきぐ一命分たくけ〜くべ慈悲ぐ情ぐゆよのうくいひつ〜追すへくれ
身分のぶまんと申〜わ〜くくびぐ衣ふくあくる菊麝のかをう鼻でおくひ
く恰も嬋娟る芙蓉花の風ふわくるふ似くうくうゆ〜く恨あくも肩先
ニとすきうくとめべ呀と一色くんひ〜くうぶ〜ふ倒きくくび絶入くくぶ頭分


野分方姫如ふこう
兵藤大ゐ
命じて
玉琴を
捉へ
しむ


前


其二

玉琴最期の
怨念ふかく
頭髪蛇と化し
野分方ふむひ
うごめく
のがれ

あげあな苦しや堪がたや此館に慈悲ある人のおはしまさバ妾が命をたすけ給ひてたべと声高くよばへど草木も眠れる丑三の頃といひ間を隔し深殿なれバ誰とてある者もなく折しもつよれ夜山嵐の庭木をならすのミなり無慙や玉琴ハ手を負て總身ハ朱に染ながらもひまなく一度ハ野分の方にむかひ一度ハ兵藤太にむかひ掌を合してしばしの命をのべ給へと願へど野分の方ハ答もせず只うちけしてそしろよげにみやりゐたれバ今ぞはやく苦痛をさせよと目を以てしらするにぞ兵藤太その意をさとり玉琴が名のくびつかミて刀をとり直し胸の上に乗やくとおしあてしハ玉琴ハ苦しき息をつきさハいかにいかにも殺し給ふか殺さバとく殺せし物の報をあるものをかなしものか生かり死かり六道四生に怨をなし思ひしらさでおくべきかとたち声もしばげにおめきたれバ野分の方あざ笑しやれ殺せと命

ずるにぞ兵藤太ふたゝび刀を取なほし玉琴が吭にぐさとつき通しけれバ血しぶきとやどぶと手足をのばし牙をかむ断末摩の苦目をあてられぬありさまなり時に怪や今まであかくてらせし灯火にはかにあをくなり玉琴がたけなる黒髪さかくと立てそうさまにのびるとひとしく忽蛇と化し野分の方にむかひ首をさゝげて蠢めり膽太き野分の方もこれをみるとひとしくぞつと冷わたりしばし夢のこゝちしけるが良ありて心つき眼をひらけバ黒髪も灯火ももとの如しされバ兵藤太にいひ付ざりける嗚呼哀哉嗚呼痛哉玉琴ハ十七歳を一期として黄泉の鬼となりはてぬ扨野分の方命じけるハ此女のなきがら後日の僉義厳しかるべし屍を土中に埋なバせば万一あらはるゝこともあるべけれバ大江山に負行赤裸となし面の皮をむきとり谷川深き所にしづめにかけよ衣服ハ目立しあり

鎧櫃ふハ血つたとり皆彼所ゑ〜焼失ふべ事と全く色とハ再来りて
吉よ我なほ安心とべきと夜のあけぬ内ふとく〜せよ兼く約〜きれ
賞金ハこふあるど〜〜一代衣の金ハ生〜〜うんせられば貪欲深ハ兵藤
そどろふ若び手だゆ〜屍ハ櫃ふおーゑ員後門より生〜大江山へと急ハ
行め野分の方ハ様さんふ立〜後ハ送り行ゆん心ふうるづハ〜れ
山時已ふ雨ゆと風ちづまり千年山乃月霞のうへふとと〜陰〜とと
なるハちづめあゑ艶なる景色哉朧月夜ふち〜物ぞあハとよみ〜も
うべなりと獨語〜ふおちつハ〜ちさめるち〜の人ふあ〜ど誠是大膽
不敵の女子なりかく〜兵藤太ハ月の光りふ乗ふ空ハ走らづで〜
ゆと〜彼山ふつき玉琴ハ屍ハ生〜〜衣服をくぶ面の皮ハむさお色
ろ石とちうまる〜谷川ふちづめ衣服も櫃も焼とそ〜わとうなく色

とりそぐちふ又馳飯〜彼深殿ふいれば野分の方ハりとのぐ〜待
居〜り兵藤太頭ハさげおゆせ〜ヨしほとりういち〜念入〜そう〜ひひと
ゆと野分の方ちひでとさら早ら色ぞいぐ約せ〜とうら當座の賞金を
ちう〜とべ〜ち〜錦の袋ふいまてる一百両の金子ハ与へられば兵藤太ハ
戴きこづうの功ハ〜莫大の恩賞ハ生ものあらぬ〜かくぐけるハ
まぐふおゑえ結べうと〜満面ふ名〜ハふくこう〜懐ふ収られば野分乃
方ハ〜ゆ〜〜汝ハ大丈夫の魂とうえぬれとそかる大事へ〜つけ
ちうのくや夜明ふ間もあとこ〜〜うと〜休息せ〜〜〜いとまとこ〜れば
兵藤太ハ茶礼と色滕行〜様とぐ〜んとしちれ所ふおりひうけざれ
背後より野分の方長刀とおうとうのべ兵藤太ハ右の脇の下ハ〜〜ふ
かけれが呀と一声こけびあぐ〜うっぷ〜ふ仕とちうさど長刀ハ〜ハ色ふ

野分の方
後日密計の
めくハまんとを
おそれ計り
兵藤太を
殺さ

曙巻之一

さりなから花かりくとときれば首ハ前ふどおちくらる野分の方まで
手ふ鮮血ちくる首ハ提長刀小脇ふかいとくく庭ふとらくら飛石ハ
つくひくく寝殿ふちらづれのよりく盗人いらくるど侍宿の者ども乗ま
邑ところふ味りれでいざくるれ侍女等もあひくふ目ハ醒太ふ騒動
くくてんでふ手燭をてしくせあつまりれば野分の方ハくるさまを
盗人ハ我打どりつ灯火ハ消へとらふ侍女等手燭をさくく出せば野分乃
方斬首ハてしくいと驚さる体ハ他ちり忍入くる賊なりと
おのひくふこれいまま兵藤太あんめくどや我ひら目ら汝等よくくんと
いふ侍女等このぐさくく覗見くいくふも兵藤太ふ行あくいとちと山時
侍宿の武士等おくまでせふくせめつまりめ野分の方怒れ体を邑家れ
亂あくめくんこいりざりた此者當家の禄ハくくく露でりもふ不ちち

あるまりでれふ行ゆるふ盗ハとりや我ふ嚴おくれくく奥坐敷おかれりくく
ハ彼所ふくく打とりめ汝等彼所ふ行く軀ハあくくあくくと命ド
くれば侍宿の武士等彼所ふゆるくく兵藤太ハ懐中の金袋とくつの出
持来りくくまば野分の方これをくくてくれハ我手まりの用金あるちく
ぐりハ相公別館ふのくおいとゆるふ上館の用心おのづくく怠あくんと侮りく
思入くくふ疑ハ不忠不義の奴才ふとくぶやた俄ふ湯ハひた衣服
と著くくくくくぐくくく寝間ふいりめ扨ハどあく夜あければ兵藤太ハ
屍をとりをくく皆くく評議くいくりくハ君ふ兼くく剣術を学びあひ
ぬまども事ふ臨くくぐくりの御手あくくあくんとハ思ハざりた羅綺ふくま
堪ざる御姿ふくく此度のごとくくくた一ふハ誠ふ奇た婦人ふ
女中の丈夫とくやりをべきと感じくく其隠悪ハ知た者ハ一人もあくくら

なりおよぶ漢の呂皇后戚夫人なども苦しめられもてるるかう
まうさまれ暴悪なり彼婦人ハ似ど巧ハ密謀なかどと人へとれな
知しるべとのべども湛こまれ青天欺ぞ〻どもるふいてうひこ
天罪なかうふり身体微塵ハくぶけく死しまうんぬ誠是婦人
まれりのつしむべたハ嫉妬乃心なり豈おそれざるんや慎ざるんや

曙草紙巻之一終